

地域情報（県別）

【東京】がんと脳しんとうのリハに挑戦、3年後にはがん治療クリニックも-山口潔・医療法人社団創福会理事長に聞く◆Vol.3

2021年10月29日（金）配信 m3.com地域版

認知症とがん、フレイルの対応を「3本柱」とする医療法人社団創福会の山口潔理事長は、「柱を太くしつつ、さらにもう1本増やしたい」と展望を話す。がん患者に対する術前リハビリを始め、3年後にはがん治療に特化したクリニックを作る考えだ。「もう1本」としては、スポーツ神経学を駆使した脳しんとうのリハビリプログラムを開発したいという。積極的な地域活動の内容も聞いた。（2021年8月20日インタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

——医療法人財団創福会は地域活動にも積極的な印象を受けます。ここまで多様に行っている医療機関は珍しいと思いました。

地域の人が医療につながる手立てを増やしたいと、クリニックの外に出ての活動は以前から継続して行っています。開業して8年がたつ今、その内容にも広がりが出てきました。

まず挙げられるのが、「暮らしの保健室」です。これは、訪問看護師の秋山正子さんが「気軽に訪問看護や在宅ケアに出会える仕組みを」と、2011年に新宿区の大規模団地で始めた取り組みです。予約不要で健康や暮らしに関するさまざまな困りごとを医療者などに無料で相談できるもので、現在、全国各地で場づくりが進んでいます。

当法人も以前から「よろず相談室」と銘打ち、内容を限定せずに看護師が患者さんやご家族の相談に無料で応える活動を行っていました。よろず相談室のコンセプトは暮らしの保健室のそれと合致することから、秋山さんに暮らしの保健室の仕組みや運営のポイントなどを聞いた上で名称を変えました。今は本院だけでなく、地域の衣料品店と老人ホームの相談窓口の2カ所でも週に1回開いています。



山口潔理事長（法人提供）

——暮らしの保健室は増えてきていますよね。他の医療機関の取材でも聞くことがあります。認知症カフェやがんサロンを開くほか、地域活性化のプロジェクトにも参加しているそうですが。

はい。囲碁で交流を図る認知症カフェ「一福老（いっぶくろう）」や、がん・難病の患者さんとそのご家族向けの交流会である「やすらぎサロン」を月に1度開いているほか、もの忘れが気になったり、社会参加をしたかったりする人向けに音楽療法や回想法、体操などを織り交ぜたプログラムを提供する「ふくろう広場」も公認心理師主導で行っています。

これらに加え、本院に近い世田谷区尾山台の住民や学校、商店などが集まる「おやまちプロジェクト」にも参加しています。医療の世界では前から「在宅クリニックが町づくりをやったら面白いのでは」と言われていて、私も関心があったのですよね。それで町づくりの専門家を探して東京都市大学の坂倉杏介准教授を知り、先生にメールをしたところ、彼が発起人である同プロジェクトを紹介してくれました。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が流行するまではプロジェクト主催の飲み会に参加したり、イベントに出店したりしました。

こうした活動を重ねる中で、地域の方が医療や福祉に関心があることを改めて感じました。暮らしの保健室の開設もプロジェクトメンバーの声からアイデアが浮かんだもので、地域医療を展開していく上でとても良い刺激をもらえます。若い学生たちと話す元気ももらえますし、地域との絡みは熱い（笑）。

——先生の人柄が想像されるお話です。医療の面でも新たな展開を考えているのではないのでしょうか。

診療内容をさらに充実させ、分院をもう一つ作る予定です。まず診療内容の点では、がんリハビリテーションとスポーツ神経学に挑戦していきたいと考えています。当法人の言う「がんリハ」とは、術後ではなく術前からフレイル・サルコペニアの予防や進行抑制に取り組むものであり、日本ではまだ本格的に行っているところが少ない印象です。がんに限りませんが、外科手術を受ける際に患者さんがフレイル・サルコペニアの状態であるかどうかによって術後の経過が異なると考えられています。平たく言えば、手術を受けるときに心身ともに元気な方が予後が良くなりやすいのです。

当法人では以前からがんの2人主治医体制を作りたいと活動してきました。「2人」とは、身近なかかりつけ医と専門的な治療を行う医師のことです。がんの治療は初期では標準的な治療を行うことが一般的であり、ある程度の効果が見込めますが、進行するにつれて明確な答えはなくなっていきます。どの治療を選択するかは患者さんの生活背景や思いで異なってくるので、「そんなときに身近なかかりつけ医として患者さんが何でも相談できるようにしたい」というのが私の思い。

この体制構築のため、当法人ではまず、訪問看護ステーションを立ち上げて緩和ケアチームを稼働させ、訪問リハビリと通所リハビリを行ってきました。続いてがん緩和ケア外来とがんメンタル外来を始め、現在は病院の緩和ケア病棟とも連携しています。これらに術前からのがんリハビリが加われば、がんサポートケアの構想が完成に近づいてきます。

——「スポーツ神経学への挑戦」とは具体的に？

脳しんとうのリハビリに有効なプログラムを開発していきたいです。私はスポーツと脳しんとう、認知症の関連に関心を持っているのですが、それは以前から知られていたボクシングだけでなく、アメリカンフットボールやラグビー、サッカーなどのスポーツ選手も認知症になりやすいと近年になって考えられるようになったためです。2019年には、「プロサッカー選手は認知症などの神経疾患で死亡するリスクが一般人より3倍以上も高い」とする研究結果が米医学誌の「ニューイングランド・ジャーナル・オブ・メディシン」に発表されました。因果関係は不明ですが、認知症専門の医師としては興味深いものです。

私の知る限り、日本に脳しんとうを専門とするクリニックはほとんどありませんが、海外ではリハビリを通して脳しんとうの後遺症を防ぐ先駆的な研究があると聞きます。世界的な研究例を参考にしつつ、当法人の理事を務めるスポーツ科学の教授や脳しんとうに詳しい院外の専門家と協力しながら、プログラムの開発に取り組んでいきたいです。

——分院展開について詳しくお聞かせください。

3年後をめどに、東京大学医学部附属病院の分院跡地にがん治療に特化したクリニックを開院する予定です。当法人は認知症、がん、スポーツ分野に力を入れていきますが、認知症対応の構想については本院と自由が丘の分院における設備と人的体制で完成に近づけるでしょう。そこで、別の柱の一つであるがん対応により力を入れたいのです。

地域のクリニックにおけるがん患者さんのサポートケアの充実化は先述した通りですが、将来的には治療そのものを行っていきたくいですね。今はがんの治療を入院せず通院しながら行う時代ですから、外来での化学療法や乳腺腫瘍の摘出など日帰りのできる手術も行いたい。イメージとしては、入院治療などを行うがん拠点病院とサポートケアを行うクリニックの中間の存在です。

私は老年科専門医として認知症やフレイルの先端的な医療を行いたいと思い、開業しました。在宅医療を絡めた地域医療を提供するためには多職種と密に連携を図ることが必須ですが、医師の役割としては病気の診断と治療を進めていくことが最も大切だと考えています。今後もディジーズに特化した展開をしていきたいと考えていて、中でもがん対応に関してはさまざまな病院の先生方と協力していきたいです。

◆山口 潔（やまぐち・きよし）氏

1999年浜松医科大学卒。2007年東京大学大学院修了。専門は老年医学。自治医科大学附属大宮医療センター（現自治医科大学附属さいたま医療センター）の神経内科・総合診療科を経て、東京大学医学部附属病院の老年病科で認知症など高齢者の病気の診断と治療に携わる。「高齢者総合支援診療所」を作りたいと2013年に「ふくろうクリニック等々力」を開院。2021年5月には分院となる「ふくろうクリニック自由が丘」を開いた。

記事検索

ニュース・医療維新を検索

